Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-26

臨床心理士養成大学院教育におけるイメージ教育の効果について（1）：芸術療法特論Iのスクィグル実習がもたらすもの

伊藤，俊樹

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,3(2):11-20

(Issue Date)
2010-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81002092

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002092

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要第3巻第2号 2010
Bulletin of the Graduate School of Human Development and Environment Kobe University, Vol.3 No.2 2010.

研究論文

臨床心理士養成大学院教育におけるイメージ教育の効果について（1）
－芸術療法特論Ｉのスクィグル実習がもたらすもの

The effects of image education in education system of clinical psychologist − practice of squiggle in topics in art therapy I

伊　藤　俊　樹 *
Toshiki ITO

要約：臨床心理士養成のコースである本大学院臨床心理学コースでは、「芸術療法特論Ｉ」の授業でイメージ表現に対する学生達の理解を深めることを目指してきた。本論文では、その授業の中で行ったスクィグルの実習について報告し、この実習を通して、学生達がどのようにして、イメージを通じてコミュニケーションをすることを学び、相手のイメージに対する理解を深めることができたかを検討したいと思う。具体的には、スクィグルをセラピスト役、クライエント役に分かれて、各役を各々２回ずつロールプレイをさせた。各々ロールプレイの後に、セラピスト役の感想、クライエント役の感想を書かせ、更に４回の実習が終わった後で、自分がセラピスト役を担当したクライエント役の感想を読ませ、セッションの最中にクライエント役が実際どのように感じていたのかを伝え、更に感想を書かせた。本論文では、3つの事例を取り上げ、クライエント役とセラピスト役の間でどのようなイメージによるコミュニケーションが行われ、それが臨床心理士となっていく上でどのような効果をもたらしたかを検討した。また、クライエント役の感想を読んだセラピスト役の感想をまとめ、どのような新しい気づきを得たかについても検討した。

１．問題と目的

臨床心理士養成の大学院において学生をどのように教育していくかということが、大きなテーマになっている。教育全体の大きな枠組みを考えることから、具体的なカリキュラムについて考えることまで、その議論は多岐にわたっている（日本心理臨床学会カリキュラム検討委員会　1993、下山　2000、日本心理臨床学会大学院カリキュラム委員会　2001）。臨床実践指導においては、知識教育主導の教育指導ではなく、臨床実践に密着した「実習科目」こそが大事である（藤原　2000）とも述べられている。臨床実践においては、言語によるクライエントのコミュニケーションだけでなく、非言語的媒体を用いた、イメージによるコミュニケーションが重要になってくる場合も少なくない。このイメージによるコミュニケーション（広義の芸術療法）こそ、知識教育だけではなく、実習による教育が特に必要な領域だと思われる。

イギリスでは1981年に保健サービスの中で公式に芸術療法が専門職として認められ、その教育に関しても系統だった教育が行われ始めている。アメリカでは1960年代にアメリカン・アート・セラピー協会が設立され、アートセラピーの資格ができ、大学院に芸術療法の学科が設置されるに至っている（C.Case & T.Dalley　1992）。日本では1973年に日本芸術療法学会が発足し、2004年から芸術療法士の資格認定を行い始め、国内の大学においても芸術療法学科を標榜する学科が漸くできはじめている。このようにイメージを用いた心理療法の教育に関して、少しずつ展開が見られるようになってきたが、臨床心理士養成の大学院教育カリキュラム全般の中で、イメージをどのように扱っていくか、クライエントのイメージ表現をどう理解し、その理解をどのように深めていくかについては殆ど議論されていないのが実状である。

臨床心理士養成の１種指定を受けている神戸大学大学院では、７年前より、「芸術療法特論Ｉ」の授業を通じて、学生達のイメージ表現に対する理解を深める事を目指してきた。具体的にはスクィグル、フィンガーペインティング、コラージュ、粘土、などの技法を生徒各人が体験し、自分が作った作品を媒介にしてロールプレイを行ってきた。授業では自らのイメージ体験がどのように体験され、セラピスト役、クライエント役との相互作用がどのように感じられたかを記述させた。自らのイメージ体験を通じて、いずれ自分がセラピストとしてクライエントのイメージ表現に立ちあったときに、その理解を深められるようにすることを目指したのである。本論文では、特に「芸術療法特論Ｉ」の授業で行ったスクィグル法の実践

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

（2009年9月1日　受付
2010年1月12日　受理）

を取り上げた。通常の芸術療法では、クライエントが作品をつくり、その作品をセラピストが受け止め理解しようとする形を取るが、スクィグル法はセラピスト自らも作品をつくることによって、イメージによるコミュニケーションに積極的に関わっていくことになる。つまり他の芸術療法と比べて、非言語レベルでの相互作用が大きく働くものであり、そのようなイメージによる相互作用を実習の中で体験することが、セラピストとしてクライエントに非言語レベルで関わっていく際に１つの手がかりになると考えられる。またスクィグル法は、臨床場面で言語化の難しい子どもや青年、成人を相手にする時に有効な技法であると思われたため、実習の中で取り上げた。スクィグル法を通じて、イメージによる非言語レベルの交流がどのようになされるのかを体験すること、自分のイメージが相手にどのような影響を与え、相手のイメージから自分がどのような影響を与えられるのかを実際に体験することで、イメージ及びイメージによる相互作用の持つ意味、重要性、を学ばせるのがスクィグル法の実習の目的である。

本論文では、この実習を通じて学生達がどのように自分と他者のイメージを体験したかを探り、それらの体験がセラピストとして育っていく上でどのような教育的意義を持つかについて考えてみたいと思う。

２．方法

臨床心理学コース修士１回生向けの授業である「芸術療法特論Ｉ」で、4 回に渡ってスクィグル法を実施した。初回の授業で中井(1977)「ウィニコットの Squiggle」、(1982)「 相互限界吟味法を加味した Squiggle(Winnicott) 法」を読ませ、スクィグル法の概要を教えた。用紙は A4 の紙を用い、最初のセラピスト役のなぐりがきは黒のサインペンで書かせ、クライエント役は黒のサインペンを使って絵を完成させた。その後の彩色は、色鉛筆、クレヨンを用意し、好きなものを使って行わせた。施行時間は１時間前後であった。１回の授業で、クライエント役とセラピスト役にわかれ、1 対１でロールプレイを行い、３往復（彩色も行う）のスクィグルを実施。計４回の授業で、クライエント役、セラピスト役をそれぞれ２回ずつ体験するようにした。セッションを４回行ったのは、初回のセラピスト役、クライエント役の体験を役立てて、もう一度セッションを体験させるためである。クライエント役、セラピスト役の組み合わせは、毎回異なるように組ませた。ロールプレイのやり方としては、セラピスト役に次のように教示した。「まずクライエント役が描いた絵に関してクライエント役に話したいことを話してもらい、その後描いたイメージに対して拡充法による連想（ユングが開発した技法で、フロイトのように１つのイメージから次々に思いつくものを連想してもらう自由連想法ではなく、１つのイメージからいくつも思いつくものを連想してもらう方法。たとえば、「犬」を描いたら、まず「犬」からイメージするものを語ってもらい、その次にまた「犬」からイメージするものを語ってもらうというように、「犬」に関していくつも連想を聞いていく方法。）を行ってもらい、クライエント役が描いたものに対してどのようなイメージを抱いているのか、できればクライエント役が感じているのと同じように、その描かれたものに対して感じとるように努めるようにしてください。その後で、セラピスト役として、何か聞きたいことがあれば、侵入的にならないように配慮して質問をしてください。」本実習では、セラピスト役になったときには、クライエント役のイメージ世界をできるだけ共感的に理解させることを目指し、クライエント役になった時には、セラピスト役のどのような対応が自分にポジティブに働き、どのような対応がネガティブに働くかを実体験させることを目指した。

セッション後、クライエント役、セラピスト役それぞれの感想を書かせ、更に、全４回終了した後で、自分が相手をしたクライエント役２名の感想を読ませ、ロールプレイに際してクライエント役がどのように感じていたかを知らせ、その感想を読んで新たに感じた事を記述させた。これは、セラピスト役がセッションで感じていたこととクライエント役がセッションで感じていたことの間にずれがあることが少なくなく（実際のセラピー場面でもそうだと思われる）、そのずれを知ることがセラピストとして育っていく上で重要であると考えたことと、セラピスト役のどのようなイメージ、反応がクライエント役にポジティブに働き、どのようなイメージ、反応がネガティブに働いたかを実際に知ることも、今後のセラピストとしてのクライエントに対する働きかけに際して、１つの手がかりになると考えたからである。

３．事例

授業を受講した学生は 14 名であり、２人１組で実施したので、1 回の授業につき７つの事例が実施され、4 回実施したので全部で 28 の事例が実施された。ここでは、クライエント役、セラピスト役の心の動き、感じたことが詳しく書かれ、どのような相互作用がお互いの間に生じたかがはっきり読み取れた３つの事例を取り上げた。以下、セッション中にクライエント役（以下、cl 役）、セラピスト役（以下、th 役）がそれぞれどのように感じ、どのような心理的交流が行われたか、また cl 役の感想を読んで th 役がどのように感じたかについてまとめ、考察したいと思う。

【事例 1】

・スクィグル１枚目（cl 役がなぐり描きし、th 役が描画、以後交互にやる：図１－１）

「　」は cl 役の発言、〈　〉は th 役の発言。

th 役：なぐり描きを見て比較的すぐに羊の絵が見えてくる。セッション前の会話から、私も cl 役も若干緊張しているように思われたので、なにかほんわかした感じの絵を描きたいと思っており、それに合致するように思われたのですぐに描き始める。

cl 役：淡く薄い彩色で穏やかな感じだったため、気持ちを楽にして始めることができた。

図１－１

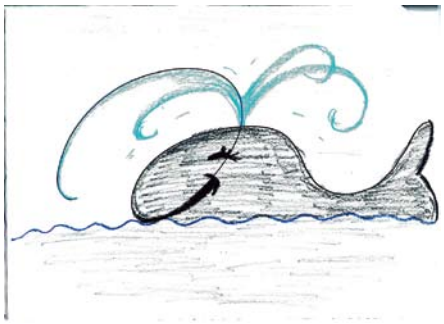

図１－２

図１－３

図１－４

図１－５

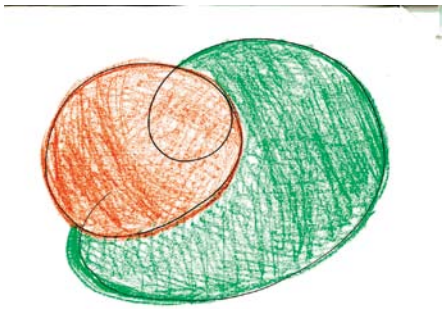

図１－６

・スクィグル２枚目（図１－２）

cl 役：鯨の胴に見立てて描いていくうちに潮を吹いている感じを出したくなって大きく弧を描く潮を何本か描いた。気持ちよく豪快に潮を吹き出し、すっきりして笑顔になれる、という感じが自分でも描いていて楽しくなった。

th 役：「深いところに潜っていて、やっと水面に出てぷはーっていう感じ。」〈やったーって感じ〉「そう、やったーって…エネルギーが出ている感じ」非常に生き生きとした様子で語られ、私も楽しくなる。潮について語られることが多く、なにか重要な意味があるのだなと思う。

・スクィグル３枚目（図１－３）

th 役：なぐり描きを難しく描いてしまったことを謝られ、〈そんなことないですよ。〉と返すが少し焦っており、早く絵を描かなければと思う。鳥を描く。青、ピンク、緑色の鳥を順に描き、空を彩色する。ピンクの鳥を太いクレヨンで目を描いたため、目が飛び出してしまったように失敗しており、そのことが悔やまれる。

cl 役：自分が描いたなぐり描きが、自分では羽のように見えたが、画面の右端に寄ってしまったので、セラピストには使いにくいかなーと思いながら渡した。th 役もやはり羽をイメージしてくれた。…鳥は半分画面からはみ出していた。なるほどそうすれば右側に偏っていてもうまく使えるのだなと、と感心した。画面をはみ出しても OK なのだ、というのは考えてみればそうなのだが、自分の最初の発想にはなく、危惧していたことが簡単に解決できた感じがして気持ちが軽くなったような感覚になった。同時に私の考え方は柔軟ではないな、とも思った。

・スクィグル４枚目（図１－４）

cl 役:角のように出ているところが気になって、そこを新芽と考え、種から芽が出ている描画にした。…芽のところを様々な色を使って塗ったが、先端は鮮やかな黄緑で、周辺も黄色に塗り、輝いているような感じを出した。

th 役：この絵は私にとって非常に印象的である。かなり念入りにオレンジを塗っていく。「エネルギーが出てて」と中心部を中心として芽の方に広がっている。〈これは種ですね。「そうです、芽が出てて。」〈これ（絵の中心のオレンジの部分）はエネルギーで、エネルギーが種の中と、芽の方までしっかりいっているんですね。〉「もう今にも飛び出しそうな感じで」本当にもうすぐ芽が出そうでエネルギーも十分、これからどんどん伸びていくかもしれないこの芽と種について話し合う。

・スクィグル５枚目（図１－５）

th 役：火山の絵であり、噴火している。破壊的な感じであるが、先ほどの絵やクジラの絵のようにエネルギーにあふれていて、また新しい始まりのようにも自分では感じ描いた。私としては、もっとほかの絵にして、より連続性のある絵にすればよかったと思う。この絵について cl 役は「なんか静観できる。」とのことであった。〈静観できるとは？〉「なんか、日常的な感じとして見れる。遠くにあるからかな。」

cl 役：火山の絵は激しい噴火の様子を描いていながら穏やかな雰囲気を感じた。大変な状況でありながらそのように静観できると感じたのは何故なのか、という点が不思議だった。

・スクィグル６枚目（図１－６）

cl 役：何も連想できず困った。何となく緑とオレンジに塗りたくなり、とりあえず塗って行くことにした。塗るうちに、２つの卵のよ

うなものが重なっている図とすることにした。

・スクィグル後の話し合い（th 役の感想）

cl 役は鯨と種と火山の絵が好き、とのことであった。これらはエネルギーとその表出を表していることが明らかになった。火山の絵を静観できる理由として、cl 役は「こういうことも必要」「こうしなくちゃいけないことが分かっている」と述べる。「今になって（この cl 役の人はある程度年配の人である）私にこんなにエネルギーがあるなんて」と述べられたことから、これらの絵は cl 役の現在の状態を多少なりとも表していると考えられた。

・cl 役にとって、th 役とのやりとりがどのように感じられたか。

cl 役が描いたクジラの絵と th 役が描いた火山の絵には共通点が多くあった。たまっていたエネルギーが外にあふれ、気持ちよくはき出せている感じがある。新芽にしても、卵にしてもエネルギーのかたまりからなにかが出てくるものである。自分の中にそのようなテーマがあるのだろうか、と考えさせられた。

・th 役にとって、cl 役とのやりとりがどのように感じられたか。

4 枚目については、cl 役の内的な状態が描かれたのではないかと思う。この絵についての話し合いで、エネルギーにあふれ、これからどんどん伸びていこうとし、これからに希望のある状態という解釈に至った。cl 役は、「私はこんな感じなのかな、なんか恥ずかしいわ。」と述べていたことからも、cl 役のふだんあまり意識していない状態が反映されたのかもしれない。5 枚目は、cl 役には「静観できる」ものの、cl 役にはしっくりこず、それまでのセッションで cl 役の中に湧いてきたイメージを中断させてしまったのかもしれない。4 枚までの解釈を自分なりにもっと深く行い、cl 役のイメージをもっと発展した形で描くことができれば、cl 役の 6 枚目はもっとはかどったかもしれない。5 枚目は迷いながら描いたが、私自身としては失敗だと思った。この絵はエネルギーにあふれる cl 役の絵に影響されて思い浮かんだ。私なりに感じたイメージを描き、cl 役もこの絵を気に入ったものとしてあげているが、cl 役のイメージの喚起につながるもう少し発展的な絵を描けばよかったと思う。

・cl 役の感想を読んだ th 役の感想

3 枚目については、cl 役の感想を読んで、こんなことを思っていたんだと知ることができてよかった。cl 役はこの絵を見て「こんな風に描けるんだ」と言っていたが、その時は、この線から鳥が描けるんだ、という意味で言っているのかと思い、気にとめていなかった。それが画面からはみ出して描いたことを指しており、そのことが cl 役の危惧を低減することにつながっていたとは思わなかった。これが実際のセラピーであれば、その場で得られた新しい発見を共有したり、クライエントの新たな一面に気づくチャンスを逃すことになるかもしれない。自分や相手に開かれているということや、共感的理解は重要なことであるが、やはり難しいものなんだなと改めて思った。ただ、今回のセッションを通して cl 役が、自分の中にあるテーマについて気づくことができてよかったと思う。

【事例 2】

・スクィグル 1 枚目（th 役がなぐり描きをし、cl 役が描画。以後交互にやる：図 2 － 1）

cl 役：ある部分が口のように見えてそこに歯を描いた。すると、それは鮫のように見えてきて、つり上がった目を描き加えてしまった。筆を加えるごとにそれは攻撃的な生き物になり、火を噴き、小さな魚を襲っている。th 役が、終始励ますように「うん、うん」と相づちを打ってくれたので、勇気を持って描くことができた。なにか奇妙な生き物ができあがってしまった。

th 役：見える絵に対して不確かであり、th 役に助言や確認を求めているように感じられた。〈何でも、感じたままに描いてくださいよ。〉と言うと、やがてとまどいつつもサインペンを取り描き始めた。

図 2 － 1

図 2 － 2

・スクィグル 2 枚目（図 2 － 2）

th 役：なぐり描きが波であるように見えたため、青色で彩色する。波が大きいため荒れているように感じられる。不適切かと思いながらも、波の下に明るい色で魚を数匹描き入れる。「水玉がすてき。」「かわいい。」と cl 役は水玉が気に入っていた様子。なぜかやはり、波が大きいことが気になり、波の上にトビウオを描きたす。cl 役が「かわいい。」を繰り返すことにとまどいながら、この描画を終了する。

cl 役：自分の絵が海の生き物だったので、それを受け止めてもらえた気がした。波は大きくなにかを阻むように立ち上がっていたが、波に乗るように穏やかに飛ぶトビウオや、海面下を穏やかに泳ぐ魚たちに癒される感じがした。

図 2 － 3

・スクィグル 3 枚目（図 2 － 3）

cl 役：上に伸びてゆく植物が見えたので、それを描こうとする。花

の周りが寂しい感じだったので、蝶や芋虫や草や小さな花を描いた。やはり、th 役が終始励ますように、「うん、うん」と相づちを打ってくれたので、気をよくして、あれこれ描き加えていった。左上の空間が空いていて、気になったので、そこに鳥を描く。あまりにものどかな風景に物足りなさを感じて、鳥は黒く、なにかをねらっている感じにした。

th 役:前回よりも積極的に描き出す。蝶を描いた後で、「なにか違う」と羽と触角を描き加える。それでもまだ少し迷っているようだったので、〈十分蝶に見えますよ。〉と言う。鳥についても不確かで、「飛んでいる鳥」を描こうとしているも、翼のない鳥を描く。

図２－４

・スクィグル４枚目（図２－４）

th 役：蛙を描く。cl 役は「蛙だー」とうれしそうに言う。図２－１にならってほおに色づけをする。空白部分が多く感じ、図２－３と同様の色を用い花を描き加える。「かわいい」等ほめことばが出る度にどう対応してよいか分からず困る。

cl 役：私は雨蛙が好きなのでとてもうれしく感じた。また、私が花の絵の周りに描いた小さな花と同じ花を同じように描いてくれたのが、うれしく感じた。

図２－５

・スクィグル５枚目（図２－５）

cl 役：先の雨蛙の絵に気をよくして、見えてきた可愛い猿の顔を思うままに描いた。色を塗っているとどんどん可愛くなっていくので、描いていて楽しくなってきた。th 役が、終始肯定的に相づちを打ってくれるので、ずっと描いていたいような気持ちになってきた。猿が喜んでいるように見えたので、猿の視線の先にバナナを描こうと思った。これまでバナナの絵は描くのが難しいと思っていたので躊躇する。しかし、失敗してもいいかなと思えるくらい気が大きくなっていて、思い切って描いてみた。意外にバナナらしいバナナが描けたので満足する。一番気に入っている絵になった。

th 役：前回よりも更に短時間でうれしそうな猿の絵を描く。バナナを描くのが難しいと言い「これ（描いたバナナ）も微妙なんだけど。」と言うので、〈バナナですよ。すごく上手。〉と感想を述べる。「ありがとう。よかった。」とうれしそう。

図２－６

・スクィグル６枚目（図２－６）

th 役：犬の絵を描き、犬小屋と骨も加える。「可愛い」「上手」などのほめことばにどう反応してよいか分からずに困る。

cl 役：犬は茶色で、猿の輪郭の茶色とのつながりを感じた。犬の表情は骨を前に「待て」を命じられているように切なそうだった。

・cl 役にとって、th 役とのやりとりがどのようなものに感じられたか。

th 役の終始肯定的な態度は、描画に苦手意識を持つ私にとっては励ましとなった。また、色やテーマでつながりをつくってくれたので、自分の絵が受け止められているように感じた。１枚目の海の生き物の攻撃性は、私の中の描画への抵抗を表しているように思える。３枚目の植物の絵ものどかな光景を描きながら、油断なく見張っているような黒い鳥の存在を描き加えずにはいられなかった。４枚目の th 役の雨蛙の絵で私の緊張がほぐれる。５枚目の絵は今までの絵とは対照的に、思うように描けて満足ができた。猿のにこにこした表情は自分の気持ちと同じだと思う。スクィグル法を始めて体験して、苦手意識がなくなってよかった。もっと描いてみたいように思っている。th 役の力だと思う。

・th 役にとって、cl 役とのやりとりがどのようなものに感じられたか。

図２－１の怪獣と襲われる小魚は、絵を描かなければならないと理解している一方で、絵を描くことに抵抗と漠然とした不安を持っていたことの表れであるように感じた。図２－３は、生命感あふれるのどかな絵になる。cl 役の困惑がほぐれつつあるように感じた。しかし黒く描かれた鳥は翼がなく絵の雰囲気と似つかわない。セッション後にそのような感想を述べると、「この鳥がねらっていてまだまだ安心できない。」とのことであった。まだ絵を描くことに対しての抵抗や何らかのとまどいが感じられる。図２－４では、cl 役は蛙が好きとのことであり、本当にうれしそうであった。図２－５では絵を描くことへの困惑や不安が取り除かれ、のびのびと描画されたように感じた。セッションで一番とまどったのは、cl 役からほめ言葉が続いた時であった。図２－４のように、誉めるということが cl 役の何らかの内面を反映する場合もあると思うのでうまく反応していきたい。絵についての解釈を cl 役に求めたりするよりも、絵についてお互いが感じたり思ったりしたことを話し合っている方が、より cl 役の状態について知ることができた。「作品をともに味わう」という姿勢が重要だということを実感した。

・cl 役の感想を読んだ th 役の感想

図２－４で私が蛙を描き、その周囲に図２－３で cl 役が描いたような花を描いたが、こうすることに私は少し抵抗を持っていたように思う。わざとらしく相手と自分をつなげようとする作業のように感じたからである。私が抵抗なく、自然と相手の絵の要素が自分

の絵に取り入れられた時に、本当に相手の世界やその場で起きていることを共有していることになるのか、ある程度意図的に取り入れるものなのか、を少し疑問に思った。今回、私は意図的に取り入れたことになると思うが、cl 役は肯定的にとらえてくれたようだ。おそらくケース・バイ・ケースで相手との関係により異なるのだろうが、相手の絵のパーツを自分の絵に取り入れることに自分が少し抵抗を感じていることが分かってよかった。cl 役は、絵を描くことが苦手とのことだったが、cl 役の描くことへの苦手意識が和らぎ、満足のいく絵が描けたことが何よりだと思う。

【事例３】

・スクィグル１枚目　（th 役がなぐり描きをし、cl 役が描画。以後交互にやる：図３－１）

cl 役；私はすぐに花が思い浮かび、葉と花をクレヨンで描く。th 役に連想を促され、絵が強風に負けずに地面にしっかり足をつけ、きれいな花を咲かせて、空に向かってたっている花のように感じる。

th 役；絵を見ると根付いていると言うよりは地面の上に置いてあるような感じがしたが、連想などでも、cl 役が何度もこの花の負けず嫌いさ、粘り強さ、勢いなどについて語ったため、これが cl 役の捉え方だと考えあえて聞かなかった。

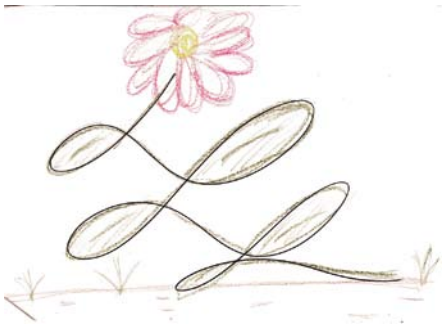

図３－１

・スクィグル２枚目（図３－２）

th 役：ピクチャー１の「花」の頑張り、勢いはとても印象的だったので、少し無理をしているとことがあるのではないかと感じた。この「頑張りを」ほめてあげてあげたくなったため、子どもを暖かく抱えほめている熊の親子を描いた。小熊が花を母親に贈っているという設定で描いたが、描き終わってから、あれほど頑張っていた「花」をここで「採ってしまう」のはいけなかったかもしれないと反省した。

cl 役：熊の親子が th 役によって描かれ、熊の手には１枚目に描いたものと同様の花がある。連想を促されるもこの絵ではあまり連想が進まない。

図３－２

・スクィグル３枚目（図３－３）

cl 役：蛇とカタツムリが見えたが、蛇が攻撃的に見え、カタツムリを選ぶ。

th 役：すごく「マイペース」でのんきで元気なハイテンションな性格だと話した。

図３－３

・スクィグル４枚目（図３－４）

th 役：ピクチャー１の「勢い」「頑張り」とピクチャー３の「マイペース」さ、「テンションの高さ」が印象的だったため、元気よく、勢いよく、太陽に向かってジャンプしている蛇が見えて、それを描いてみた。これについて cl 役は「勢いの良さが好き」「この蛇もマイペースに見える」という連想を語ってくれた。テンションの高さや元気さがピクチャー３のカタツムリに似ている、体のくねくねでジャンプしていることがとても伝わると指摘してくれた。この絵になにか付け足したいものはないかと、聞いてみたら、蛇に牙を書き足した。これまではとても肯定的なイメージを聞いていたので、この牙が描かれたことは意外に感じた。cl 役が話す「勢い」「頑張り」「マイペース」さには多少過剰なものを、また話し方などからどこか攻撃的なもの或いは防衛的なものを感じていたため、この牙が描かれたことは意外なようで納得も行くようで印象的だった。

cl 役：th 役が描いた絵は蛇の絵であった。可愛らしいのだが、なにかしっくり来ない感じがする。

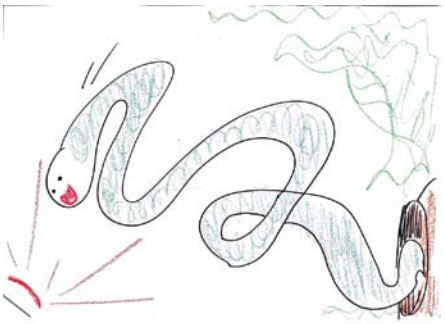

図３－４

・スクィグル５枚目（図３－５）

cl 役；なかなか思い浮かばない。何度か紙をくるくる回して、ようやく長靴の絵が思い浮かぶ。この長靴についての連想を聞かれ、「履いてもらえることを待っている。いつでも準備 OK ってかんじ。でもきれいに使って欲しいとも思っている。」と述べる。なかなか連想がはかどらず、少し気まずく感じる。

th 役：今までの絵の「勢い」「頑張り」「マイペース」さとは対照的に感じられたため、特に印象的だった。ただ、この長靴が cl 役のものではないということが協調されていたのも見逃せないと思った。

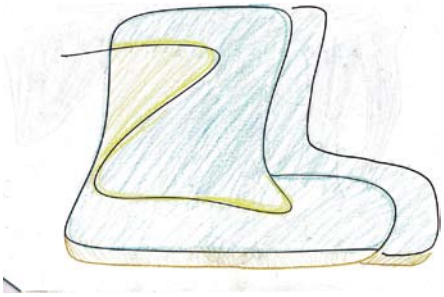

図３－５

・スクィグル６枚目（図３－６）

th 役：「長靴」の気持ちを引き継いで、「車が水をはねたが、女の子は大事な長靴を守るために傘を開き、無事に守りきることができた」という絵を描いた。

cl 役：特にたいした感想なし。

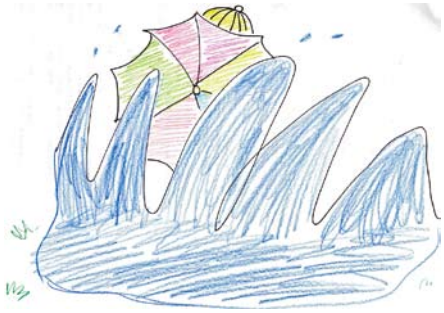

図３－６

・cl 役にとって th 役との交流がどのように感じられたか。

th 役の絵の影響は大きいと感じる。２枚目の絵では、１枚目で描いた花が摘み取られてしまった感じがして、なんだか残念な気持ちがした。このように思ったことは th 役に申し訳ないような気がして言えなかった。その影響で、３枚目の絵では、蛇が攻撃的に見え、それを描くことがその攻撃性を th 役に向けることのように思われ、蛇を描くことをやめる。５枚目の絵に関しては、今までの絵と同様、自分らしく、マイペースでありたいと思う一方で、他者からの接触を常に求めているような感じがした（はいて欲しい、いつでも準備ができていると思ったところから）。

今回のセッションを通して、私は残念な気持ちになったり、なんだかセッションに乗り切れないように感じることがあった。th 役が私の絵と同様のモチーフで、また、私の描いたものや絵に現れたものを守ろうと絵を描いたのではないかと感じるが、なにかしっくり来なかった。その気持ちは２枚目の絵が描かれたことから始まった。描画による交流は言語を介さない点が１つの長所であるが、その分お互いに異なる解釈をする可能性が高く、セラピーにおいてはその進展に影響を与えうるだろう。共感、というものの難しさを感じた。セラピストが共感していると感じても、クライエントにとっては必ずしもそうとは言えないと思った。

・cl 役の感想を読んだ th 役の感想

「２枚目の絵では、１枚目で描いた花が摘み取られてしまった感じがしたが、th 役に申し訳ない気がして言えなかった」という cl 役の気持ちは非常に残念に思えた。なぜなら、th 役自身、１枚目の cl 役の「この頑張りをほめてあげたくなったため、子どもを暖かく抱えほめている熊の親子の絵を描いた。小熊が花を母親に贈っているという設定で描いたが、描き終わってから、あれほど頑張っていた「花」をここで「採ってしまう」のはいけなかったかもしれなかったかもしれないと反省した。」と感じていたからだ。そして、謝りたい気持ちを含めて、cl 役が「花」についてどう思ったかを聞いてみたが、cl 役は「この花も…うん。」としか言っていない場面がある。ここで cl 役ときちんと気持ちについて話し合えなかったことを含め cl 役が攻撃性を十分に表現できなかったせいで、この先のセラピーは遠慮とぎこちなさで一杯になってしまったのだろう。「cl 役の花を採ってしまった。」という事実を th 自身がどこかで恐れたため、このままずるずるとセラピーが進んでしまったのかもしれない。

攻撃性の表現を避けることに対して上記でも述べてきた。攻撃性を表現できるかできないかどうかということも、th 役との信頼関係がどれくらい築けているかどうかによるのだと感じたセラピーだった。

また、cl 役は「th 役が私の絵と同様のモチーフで、また、私の描いたものや絵に表れたものを守ろうと絵を描いたのではないかと感じるが、なにかしっくり来なかった。」と書いているが、自身のやり方を思い出して言えることは、cl 役が描いたものに「応える」感じまたは受け止める感じで絵を描く際、表面的なモチーフにこだわろうとするあまり、イメージ自体が見えなくなってしまうことがあるのだということを感じた。表面的に分かるような共感の仕方だと、イメージを味わうどころかcl役のレポートに書いているように、誤解や遠慮が生じてしまうのではないだろうかと思った。

６．事例１，２，３の考察

【事例１】

まず th 役は、スクィグルを前にした両者の緊張感をきちんと感じ取っており、それを和らげるために羊の絵を描いた。その緊張感を和らげようとする th 役の意図は、cl 役にうまく伝わり、cl 役はリラックスした気分になれた。３枚目では、鳥の絵を描いたが、目が飛び出してしまったことを失敗だと感じており、cl 役が、th 役が画面を自由にはみ出して描いたことに開放感を感じたことには全く気がつかなかった。これは cl 役の感想を読んだ th 役の感想にも書かれていたが、共感的理解の難しさを身をもって分からせたようである。しかし、このことに気がつけなかったことはこのセッションの中ではそれほど大きな失敗ではなかったと考えられる。むしろ大事なことは、cl 役が２枚目、4 枚目で描いた絵から伝わってくる、cl 役が持っている心理的エネルギーのテーマである。th 役は、このテーマにはきちんと気がついており、少し極端な形ではあるが爆発する火山を描いてそのテーマを展開させている。th 役自身は、「cl 役の中にわいてきたイメージを中断させた」「失敗だった」と述べているが、cl 役はその絵を見て「穏やかな雰囲気を感じた」「大変な状況でありながら静観できると感じたのは何故なのか」と疑問に思っているが、終わりの感想で１枚目の鯨の絵とこの火山の絵は共通していることに気づき、火山の絵は自分の絵のテーマをうまく展開してくれたと感じている。また、この火山の絵を、cl 役が穏やかに眺めることができたのは、それまでの間に th 役との間に穏やかなよい関係が築き上げられていたこととも関係していると思われる。従って、th 役が思っているように、この火山の絵は決して「失敗だった」わけではないだろう。th 役も cl 役の感想を読んで、自分の「失敗だった」という思いは、訂正されたのではないだろうか。

授業中のロールプレイという形であり、かつ周りに他の人 が大勢いる中での実施にもかかわらず、このセッションでは cl 役が心の奥に抱えている心理的エネルギー、これからの成長可能性とい

う大切なテーマが表現された。そのような大切なテーマが、一見無造作に描かれるスクィグルの中に表現されるということを学んだのは、th 役、cl 役両方にとって有意義な体験になったと考えられる。

【事例 2】

cl 役は、まず火を噴き小さな魚をおそっている攻撃的な生き物を描いている。この攻撃性はこの cl 役が抱えている、心の奥にある何らかの攻撃性とも関係があると思われるが、cl 役は描画への抵抗が表れていると解釈している。th 役も、この攻撃性についてあまり深追いして考えることなく、cl 役と全く同じように描画に対する抵抗と考えている。この解釈は言語化されていないが、このような言語化されていない心理的一致がこのセッションでは重要に思われる。図２－２では th 役が波を描く。ここで th 役は波が大きいため荒れているように感じて、そのままにしておくことができなかった。そこで th 役は「不適切か」と思いながらも、波の下に魚を描き入れる。さらにそれでも、th 役は波が大きいことが気になり、トビウオを描き足す。この２つが、cl 役にとっては受け止めてもらえたという感じを生じさせ、穏やかなトビウオや魚たちに癒される感じを生じさせた。th 役は「不適切か」と思いながら、魚とトビウオを付け加えているが、それが cl 役にとっては治療的に働いている。cl 役の感想を読んだ th 役は、自分が不適切と思ったものでも、cl 役にとってはプラスの意味を持ちうるのだということを知ったと思われるが、その気づきは重要であると思われる。また大きく荒れている波をそのままにしておけなかった、というのは臨床家として重要なセンスであると思われる。図２－４では、th 役が cl 役が好きだという雨蛙を偶然にも描き、cl 役は非常に喜んでいる。ある種の共時性（意味のある偶然）が生じているとも考えられ、図２－１、２－３に対する両者の解釈が一致していることを考え合わせると、cl 役と th 役との間の心の底で何か通じ合っているものがあるように感じられる。図２－５では、絵に苦手意識を持っていた cl 役が、図２－４によって th 役との間になにか心理的なつながりを感じ、心理的に解放され、描くことが楽しくなっていく。このセッションのテーマの一つは、絵で自分の内面を表現することに対する大きな苦手意識と不安を感じている cl 役が、いかにそれを乗り越え自己表現を自由にできるようになるかということであったと考えられる。それが、th 役の終始励ますように肯定的に「うん、うん」と相づちを打ってくれたこと、偶然にも cl 役の大好きな雨蛙を th 役が描いてくれたことによって、乗り越えることができた。cl 役にとってはロールプレイとは言え、意味のある心理的体験であったと考えられる。cl 役が述べるように、「th 役の力」（th 役のセンスと暖かさ）が重要な要因になっていると思われる。また、th 役は、cl 役が描いたアイテム をそのまま自分の描画に取り入れることにわざとらしさを感じ抵抗を感じていたが、cl 役は th 役の思いとは違って、素直に th 役が自分のアイテムを取り入れてくれたことを喜んでいる。

図２－２の場合でもそうだが、th 役が「不適切か」と感じたり、「わざとらしい」と感じることが、意外にも cl 役にはポジティブにとらえられることがあるのだということを th 役が知ったのは重要なことだと思われる。

あとは、cl 役が th 役の絵を誉めることの意味、th 役が誉められることに対して感じるとまどいの意味、cl 役のアイテムを自分の描画に取り入れることに対する抵抗感について、もう少し心理的に深められればよかったと思われるが、それはスーパーヴァイズなどの場面でないとなかなか難しいかもしれない。

【事例 3】

事例３は、事例１，２と比べ、今ひとつ相互的なコミュニケーションがスムーズに行かなかった例である。まず図３－１で th 役は、cl 役の語りに対して、どこか無理をしているような、頑張りすぎているような感じを抱いている。しかし、th 役はあえてそのことは言語化せず、もしかしたら頑張りすぎているのかもしれないところをほめてあげようと親子の熊を描いた。通常のセラピーの場合、クライエントが無理して頑張っているとしたら、その無理をほめると言うよりは、「頑張らなきゃ、いけないという気持ちがある一方で、ちょっと無理しているような感じがない？」というような形で、無理をしている気持ちにクライエントの目を向けさせるというような対話がなされると思う。このセッションの場合は、セラピストはその自分の感じはひとまず言語化せず、頑張ろうとしている cl 役の気持ちに焦点を合わせようとした。そして頑張っている花を摘み取って、小熊が母親にその花を贈っている絵で答えたが、その花を摘み取るという形で、頑張りすぎている花（すなわち cl 役）に感じていた違和感を無意識のうちに表現してしまったのかもしれないとも考えられる。ただ、このセッションでよかったところは、th 役がその絵を描いた後で、「頑張っていた花を摘み取ってしまったのはいけなかったのかもしれない。」ということにちゃんと気づいた点である。これは th 役のセンスの良さと言えるかもしれない。th 役によっては、花を摘み取ったことによって cl 役に与えた心理的ダメージに全く気がつかずセッションを続けることも十分にあり得るからである。そして、th 役が危惧したように、cl 役は花が摘み取られてしまったことを残念に感じ、cl 役は意識化はしていないがある種の怒りを無意識レベルで感じている。そのため次の絵で蛇を描くことが、自分のその怒りを th 役に向けることになるのをおそれ、蛇を描くことをやめた。すでにこの時点で両者の間で言語化されていない、半ば無意識レベルのやりとりがなされていると考えられる。そして図３－３で cl 役が表現したカタツムリに対しても、過剰な「勢い」「頑張り」「マイペース」を感じているが、それも言語化しないまま、図４―４に移っている。ここでも可能ならば、th 役が感じとった、cl 役のある種の無理に頑張ろうとしている部分について尋ねてもよかったかもしれない。そして th 役が４枚目に描いた蛇に、cl 役は牙という攻撃的なアイテムを加え、無意識下にあった攻撃性を cl 役も意識しないまま表現し、予想外のアイテムの追加に th 役もある種の驚きを感じている。そして、「ハイテンション」「頑張り」「マイペース」というテーマで描いてきた cl 役が５枚目で長靴を描き、感想のところで「他者からの接触を常に求めている感じがした。」と述べている。おそらく cl 役はこのセッションの中で th 役との心理的な接触、つながりを感じたいと思っていたのだろうが、せっかく th 役がかなり創意工夫をこらして、はねる水から大事な長靴を守る絵を描いたのだが、２枚目の絵のダメージが大きく、図３－６で th 役との心理的な接触を感じるには至らなかった。

このセッションで残念なのは、th 役が「花を摘み取ってしまったのかもしれない。」と思った時に、それを cl 役に伝えられなかったことである。もし、そのことを伝えられていれば、cl 役の残念な気持ちも th 役に伝えることができ、両者の間で気持ちの共有がで

き、その後のセッションが別の形で展開していった可能性が考えられる。

また、th 役が感じた cl 役の少し無理をした頑張りについてもうまくコメントできたら、cl 役が求めていたような心理的な接触が生じたかもしれない。このセッションは両者が感想でも書いているように、お互いいろいろ感じていながら言語化されることのなかったために、無意識レベルでコミュニケーション促進的でない交流がなされてしまったと考えられる。

また、事例３の cl 役は、事例２の th 役と同一人物であるが、彼女は事例２の感想で cl 役が描いたアイテムを自分の絵の中に取り入れることに、ある種のわざとらしさを感じ抵抗を感じている。事例２の場合は、cl 役は自分のアイテムが th 役の絵の中に取り入れられることに素直に喜びを感じているが、事例３で自分が今度は、cl 役になった時には、ただ自分のアイテムが th 役の絵の中に取り入れられることに事例２の cl 役のように素直な喜びを表明していない。図３－２で自分の花が摘み取られてしまったことも大きく影響しているのかもしれないが、図３－６でも cl 役は特に感想を述べていない。自分のアイテムが th 役の絵の中に取り入れられることに対する感想は、その時の th-cl 関係等も当然影響してくるだろうが、アイテムを取り入れてもらえて喜びを感じる cl 役と、そうでない cl 役がいるということは興味深いことである。このような違いはどこから来るのかは、本人との１対１の面接の中で掘り下げていかないと見えてこないものであり、この実習の限界であるとも言えよう。

いずれにせよ、事例１，２、３共に、cl 役の感想を読まないと分からないこと、見過ごしてしまうこと、読んで始めて分かる th 役と cl 役との心理的ギャップなど、クライエント役の感想を読むことが臨床家になっていくための訓練の一つとしていろいろな示唆に富むことが分かったのは、重要なことであると思われる。

7. クライエント役の感想を読んだ th 役の感想の結果と考察

ここでは、事例の検討で新たに分かったことも含めて、cl 役の感想を読んだ th 役の感想、反応についてまとめ、検討したいと思う。

・「th 役として心がけたのは、cl 役にとって、スクィグルをしやすくする空間を提供したいということであった。…cl 役の感想を読んでみるとそのようなセラピストの想いを cl 役が感じ取り受け止めてくれたような気がして非常にうれしく思った。th 役の態度はセラピーの成功、不成功の大きな鍵を握っていると思った。」「th 役の受け止めの姿勢や雰囲気が安心やリラックスなどメンタル面だけでなく、cl 役の創作意欲に関わるというのは少し驚きだった。」

これらの感想から分かるように、実習の中で th 役は何とか cl 役に対して受容的に接しようと努力したが、その態度が cl 役に伝わり、コミュニケーションが促進されたことを知ってうれしく思った、という感想が多かった。自分の態度が cl 役にとってポジティブに作用しプロセスに良い影響をもたらしたことを知る事ができたことは、後のセラピストとしての自分の支えにもなり、セラピストとしての自分を受け入れていく上での１つのきっかけにもなったのではないかと考えられる。

・「th 役の役割はとても難しいということを感じた。自分としては cl 役のイメージをふくらませるように、リラックスして自分を出せるように気遣っているつもりだが、なかなかうまくいっていないことが分かった。普段からよく話すような友人であってもうまくいかないことを実際のクライエントに対して行うためにはセラピストの技量が非常に問われることではないかと感じた。」「『受け止められていない感じがした』という報告もあった。このセッションにおいては、私なりに cl 役の絵を受け止めて絵を返していたつもりだっただけに、どうしてだろうという気持ちが強い。さらに cl 役は『th 役の絵を受け止めていた』ともコメントしており、このようなセッションの場合（th 自身もこのセッションでよいムードが流れていたとは思えなかった。）どのような姿勢を取ればいいのだろうか。正直なところ答えはよく分からない。」

この感想は先の感想とは逆で、受容的な態度で接しているつもりが cl 役にうまく伝わっていない事を知ったという感想である。この種の感想もいくつか見られたが、セラピストが思っているセラピスト像とクライエントが受け取るセラピスト像とは違っていることを理解したことは、セラピストとクライエントの間には常にコミュニケーションの上でのギャップの可能性があることを心にとどめておく上では意味のある体験になったのではないかと考えられる。ただ、２番目の感想に見られるように、自分は受け止めたつもりなのに、相手はそう感じてはいなかったというような場合、お互いに傷つくような形にならないように（たとえば教員が中に加わるなどして）お互いの間に何が生じていたのかをもう一度探求してみることは意味のあることだと思われる。

・「th 役が意図しようとしたことと、それを見た cl 役が感じたことにずれがあることが割とたくさんあって、絵で伝わることの幅の広さを感じた。その分、解釈には慎重であるべきなのだろう。th 役が『こういうことを伝えたい』と考えることに加えて cl 役がどう感じるのか、ということも良く考えておかなければならない、という当たり前ではあるが、大切なことを学べたと思う。」

この感想は、cl 役に対する受容がうまくいかなかったという先の感想と似た感想で、th 役の絵に託した思いと、それを受け取る cl 役との間にギャップがあるということを確認したという感想で、言葉によるコミュニケーションでもそうだが、イメージによるコミュニケーションだと余計に双方の捉え方にギャップが生じやすいということを学んだ例だと言えよう。しかし、イメージによるコミュニケーションはギャップが生じやすいから控えるべきだということではなく、イメージによるコミュニケーションだからこそ言語では到達できないレベルでのコミュニケーションもうまくいけば可能だということも忘れてはならないだろう。

・「cl 役は th 役とのやりとりの中で、何かしら『共感、共調、共有』を求めていることを感じた。イメージを通して表現するという行為の中でも、相対している相手との対話のようなものを人は無意識のうちに求めるものなのだと思った。更に興味深いのは、th 役との対話を通じて自分のことに徐々に気づいて行くことができるということである。」

この感想は、cl 役がコミュニケーションを通じて共感を求めている事を知ったという感想であり、なぜ th 役が受容的に接する必要があるのかを身をもって知った体験であるといって良いだろう。また、共感的な対話を通じて cl 役が新たな気づきを得るという事を知ったというのも、実際のセラピーの中でクライエントが気づきを得ていくプロセスの模擬的な体験になったと思われる。

・「cl 役が描いたやりとりの記録を読んで、th 役の自分が記録し切れていなかったことがあり、セッション中の事をいかに覚えて記

録するかが大切だと思った。」

この感想は、th 役のセッションの記憶が選択的なものであり、無意識のうちにある部分を記憶し、ある部分は記憶から排除してしまうということについて気づいたというものである。これは実際のセラピーを行っていく上でも注意しておくことが必要な点であり、重要な気づきであったといえよう。

・「私のちょっとした声かけに cl 役の気持ちが左右されていることが分かり驚いた。描画の最中にこちらから感想を言うことが良くも悪くも大きく影響してしまうことが分かり、自分が発する言葉に敏感であることが必要だと感じた。」「スクィグルのやりとりは、ただ描画の交換だけではなく、2 人のコメントから、th 役の何気ない発言が cl 役に影響を与えるのだと感じた。一人目の cl 役は『この絵が一番好き』と th 役に言ってもらえてうれしかったと書いている。一番悩んだ絵だったそうだ。この場合は cl 役はその一言を喜んでくれたが、逆の場合もあるだろうと思った。二人目の cl 役は、th 役の『今日は○○さんのことがよく分かった。』という一言が印象的だったと書いている。『自分のことを分かって欲しい』という cl 役の気持ちを知らず知らずに受け止めて出た一言だと思われる。」「セラピストの何気ない一言が、th 役と cl 役との間に、世界をたちあげることも、壊すこともできてしまうのかもしれないと思った。」

実際のセラピーにおいてもセラピストが考える以上に、クライエントはセラピストの言葉をよく聞き、そこから影響をうけるものであり、そのことを実習を通して知ったことは意味のあることだったと考えられる。

・「cl 役のレポートの中に、私の下手なわかりにくい描画だったにも関わらず、cl 役と th 役が描かれている以上のイメージを共有して『見えている』というような下りがあり、それを『尊い』と表現してくれていることに感動した。確かに表面に表れているものだけでなく、表れていないものまでも、2 人で共有し『見た』ことは不思議だと思う。それがスクィグルの中で起こるコミュニケーションのおもしろみかもしれない。…th 役は cl 役の作品に関心を向け、それを尊び、イメージの共有をすることによって、2 人の間に何かが生まれるのかもしれないと思う。」

これは上にも述べたが、イメージによるコミュニケーションはギャップが生じる危険性もある反面、イメージによるコミュニケーションだからこそ th 役と cl 役との間に意味のある出来事が生じるということを如実に語っている。

cl 役の感想を読むということは、th 役にとっては、ある意味緊張を強いるものでもあり、心理的に恐いことでもあるかもしれない。しかし、今回の cl 役の感想を読んだ th 役の感想を読んでみて、教員が予想していた以上に、th 役は cl 役のレポートから学びいろいろな重要な気づきを得たことが分かった。

【問題点と今後の課題】

上にも述べたように、cl 役のレポートを th 役が読むことは、ある意味恐ろしいことでもあり、時によっては傷付きになることも考えられる。教員としては、このレポートは th 役には読ませない方がいいと判断したものは、あえて th 役には読ませないという配慮をしてきたが、それでも cl 役のレポートを読まされた th 役にはここで取り上げられたもの以外にも、ネガティブ、ポジティブ含めて、いろいろな感想があった。自分なりに受け止めていたつもりなのに、「受け止められていない感じがした」という cl 役のレポートを読んだ th 役の感想があったが、この th 役は何故そのような結果になったのか理解、納得できていない状態で授業が終わったままになってしまった。cl 役のレポートを読んでポジティブな受け止めができた場合はよいが、そうでない場合は教員の側として th 役の側に何らかの納得、理解が生じるようにサポートする必要があるのかもしれないと考えさせられた。

また、実際のカウンセリングの中でクライエントが夢を語ったり、絵を描いたり、箱庭をつくったり、或いはプレイセラピーの中で子どもがブロックや粘土を使ってイメージ表現をするなど心理療法の中でイメージ表現が重要な要因になってくる場合は少なくない。そういう点で、臨床心理士養成大学院教育においてイメージ教育（自分自身がイメージ表現を行い、自分自身のイメージ表現の意味を考え、セラピスト役としてクライエント役のイメージ表現に関わり、クライエント役のイメージ表現の意味を考えるという体験をする。）をすることは意味のあることだと考えられる。ただ、実際の心理療法においては、継続的なセッションの中でイメージ表現が変容していくことが大きな意味を持っているのであり、今回の実習で、学生はそのような継続的なイメージ表現の変容を体験することはできなかった。今後の課題としては、全 15 回の授業すべてを使って、スクィグル実習をすることは不可能なので、課外の課題という形で決まったセラピスト役とクライエント役で数セッション行って、スクィグルでのイメージ表現がどのように変容していったかを体験させるというようなことが必要かもしれない。

それから、本研究では学生のレポートを用いたが、レポートは評価の対象となるため、実習に意味があったという記述をしてしまいがちであり、あまり意味が感じられなかったという感想や、実習の問題点、変更した方がいい点などについては、記述しにくいと思われる。そういう点を知るためには、学生に実習体験について個別にインタビューするなどして、ネガティブな側面も含めて、学生にとって実習体験がどのような意味を持ったかを検討していく必要があるかもしれない。

[参考・引用文献]

・C.Case & T.Dally（1992）：*The handbook of art therapy*. London: Routledge.（岡昌之監訳（1997）「芸術療法ハンドブック」誠信書房）
・D.W.Winnicott（1971）：*Therapeutic consultations in child psychiatry*. London: Hogarth Press.
・藤原勝紀（2000）：「心理臨床家の養成をめぐる課題」京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践センター紀要、第 3 号、77 ～ 86、
・中井久夫（1977）：「ウィニコットの Squiggle」日本芸術療法学会誌、第 8 巻、129 ～ 130
・中井久夫（1982）：「相互限界吟味法を加味した Squiggle (Winnicott) 法」日本芸術療法学会誌、第 13 巻、17 ～ 21
・日本心理臨床学会　大学院カリキュラム委員会（2001）：「臨床心理士養成システムと大学院カリキュラムの検討」心理臨床学研究、第 19 巻、特別号、6 ～ 46
・日本心理臨床学会　カリキュラム検討委員会（1993）：「臨床心理士養成のための大学学部・大学院カリキュラム」心理臨床学研究、第 11 巻、特別号、9 ～ 41
・下山晴彦（2000）：「臨床心理学の教育・訓練システムをめぐって」臨床心理士報、第 12 巻、19 ～ 32